

四. 技術者たちの宴

水張り試験は予定通りに始まった。午前中に圭介の目視検査が終り、疑わしい溶接箇所の補修が行われた。午後の時間に入るとすぐ、川村が午前中に段取りしていた水中ポンプを西側の裏通りへ持ち出した。裏通りの反対側に工業用水のコンクリートの槽があった。この水槽から水を引くのだ。

圭介が来てから好天気が続いていた。木々の梢の葉は、やわらかな空の色を背景に陽の光の中で踊っている。地底から這い上がっては、それを仰いで息をつく日々を圭介は送っていた。

水槽の水は工場内に送られ、油や機械の冷却に使用されて再び水槽に戻る。そのため、水はいつも小さく揺れ動き、そこに映る空や雑木林は切れ切れになって水面に散った。

川村が無雑作に水槽の中へポンプを入れた。水面に、工事屋たちの心を毎日なごませてくれる雑木林が静かに逆立ちしていたら、川村もポンプを入れる時に一瞬ためらっただろう。

北山がホースを持ってライニングの縁に立ち、流れ落ちる水に目を落としていた。圭介は渡り板の上に立って、徐々に上がってくる水面を眺めた。工事屋たちの泥靴で汚れた鉄板が水に洗われて黒ずんでいく。流れ込む水量は少なく水面の上昇は遅々としたものだったが、水面下をぐるぐる回っている泥の流れは圭介の目にもよく見えた。

水かさが五十センチほどになった時、北山が配下の若者を呼び、洩れた水がピットに流れ出してこないかを、ピットに下りて調べるよう命じた。水音が一きわ大きく聞こえていた。ライニングの高い所の水深が十五センチくらいになったところで圭介は裏通りへ出て、川村にポンプを止めるように合図を送った。

水を張り終わり、ピットに水が流れ出してこないことを確かめると、北山はハウスに戻って行った。高瀬と川村、圭介の三人は、水の減少量を測定するための金属の物差しを水面の高さに固定する作業をしていた。川村は、北山がハウスに戻ると告げにきた時、すぐ終わるからハウスで一服して待っていてくれるよう頼んでいた。

三人がハウスに戻ると、道具類をライトバンに積み込んでいた北山と若者が作業を止めて室内に入ってきた。

「このまま三日くらい放っておいて洩れを調べるわ。何かまずいことがあったら電話するから、その時は頼むわ……」と川村。

「あぁいいよ。大丈夫だぜ、川村さん」

そう言いながら北山は圭介のほうをチラリと見やっけて笑った。

「真藤さんがあれだけしつこく調べたんだからな……」

「いやあ、それよりやっぱり北山さんにていねいにやってもらったからね。ああして見るだけやったら見切れんもん。どうもご苦労さんでした」

「それを言うのは未だ早いんでねえの」

「ああ、そうやったな。だけど三日後には北山さんはおらんしなあ……」

ハウスの中は、一仕事終えた男たちの醸し出すくつろいだ雰囲気であふれていた。誰もがこの仕事のできばえに自信を持っていることが、一人一人の表情に現れていた。

煙草をもみ消して圭介たちが現場へ行こうとしている時、秋山がやってくるのが見えた。今までの例からして秋山がハウスに現れるのは何か苦情がある時だ。川村が「ちえっ」と舌打ちする音が聞こえ、高瀬が表情を曇らせた。立ち上がっていた三人は再びベンチに腰を下ろして待った。北山は鋭い目をして近づくと秋山を見据えていた。

秋山は意外にも打ち解けた表情でハウスの入り口に立った。座っている男たちの緊張を感じ取ると、薄い唇の間に白い歯を見せてニッと笑った。

「今日は仕事の話じゃないんですよ……」

そう言って入り口に一番近い所に腰を下ろした。そこはちょうど圭介の真向かいに当たっている。相変わらず疑い深い目をして見つめる五人を代わる代わる見返しながら、秋山はセブンスターを一本抜いて口にくわえた。

「まあ皆さんもう一服してくださいよ……」

秋山は五人をじらして楽しんでいるようだ。工事屋たちは黙っている。川村が自分の机の上のチェリーの箱を手を取った。

「実は、明日うちの工場の運動会なんですわ。当日は工事をやることは前から聞いてますけど、どうでしょうな、誰か出てもらえませんか。やはり同じ工場の中で働いている人間ということで、お互いの親睦になるんじゃないかとも思ってるんですよ」

工事屋たちの間にほっとした空気が流れた。高瀬が「ばからしい」という顔つきで秋山の顔を冷ややかに見つめた。川村も圭介も「はあ」と言っただけで無関心の表情を見せた。北山だけがニヤニヤし始めた。秋山は北山に同意を求めるように言った。

「前の工事の時には北山さんにも参加してもらいましたな。どうでしょう」

「おれは今日で終わりだよ。明日は来ねえからな。真藤さんでも口説いたほうが良いんでねえか」

圭介は慌てた。明日も工事をやるからには自分だけ遊んでいるわけにはいかない。それに、お客さんの運動会に出るなんて堅苦しくてかなわない。やめた、やめた。圭介はそう思った。

「明日も工事がありますし、ちょっと遅れ気味ですから……」

圭介が言葉に詰まった時、北山が横から口を挟んだ。

「なあ、川村さん。真藤さんにちょっと出してもらったらどうだね」

「うむ……そうやね……よし、そうしよう」

「そうや、それがいい。真藤さん頼みますわ」

高瀬が川村に相槌を打った。これで決まったようなものだった。秋山は圭介に念を押して帰って行った。

圭介は憂鬱だった。現場で仕事をしているほうがどんなに気楽だか、という思いだった。高瀬も川村も十分にそれを解っている。高瀬と川村がニヤニヤしているのに腹を立て、圭介は一人くさった顔をして新しいセブンスターに火を点けた。

突然北山が大声を出した。

「そうだ川村さん、今夜打ち上げにみんなで一杯行かねえか」

「いいねえ親方、そうしようそうしよう」

北山組の若者がはしゃぎだした。川村はちょっと口をもぐもぐさせて何かを呟いたようだったが、態度が煮え切らない。高瀬は困った顔をして下を向いた。

圭介は北山の提案に賛成したい気持ちだった。河島主任は工事現場へ出る者にいつも言い含めることが一つあった。「いいか、工事屋だって人間なんやからな、接待されたら悪い気はしないもんや。接待の相手はお客さんだけやない。必要やと思ったら業者にも一杯飲ましてやるくらいのこととはしてもいい。領収書だけは忘れんといてな」。現実主義者の河島らしい一言だと圭介は思っていた。それに今日の相手は北山だ。仕事は終わりにかけているとはいえ、腕の良い業者の心はつなぎ留めておくほうが今後のためにも良い。

「行こうか、川村さん」

圭介の声は自然に誘う調子になった。北山と直接契約関係にある川村が同席することが必要だと圭介は考えたのだ。支払いはこちらで持たって良いんだ。圭介は心の中で呟いて川村の顔を見つめた。川村くらいの年齢の工事監督には、あまり多額の費用の裁量権は与えられていないことも圭介はよく知っていた。

工事現場の組織の上では、高瀬は川村より一段上の立場にあったが、技術指導と管理監督の権限を持つのみで、工事实務上の金銭の出納に関しては全て川村の手の内にあった。そのため、このような特別の出費を必要とする場合には全く無力なのだ。形式上の上位者でありながら何もできない悲哀を、高瀬は肌を感じていた。

川村の上司の安田はそういうことにはよく気のつく男である。「わしらがよく気をつけとって、そういうことになったら、こちらが受けてやらにゃ、あの人たちはどうしようもないもんな。お宅の会社のやり方もまずいやね。あの人たちの自由になる金を少しは持たせてやらにゃなあ。見ていると気の毒になるがな」。安田は圭介にそう言ったことがあった。

圭介の一言でふんざりがついたらしく、川村は打ち上げ会に同意した。そこで圭介は自分が今夜の払いは持つからと宣言した。北山がすぐにそれに反対した。言い出しつぺは自分だから自分が持つと主張して北山は譲らない。すったもんだの末、北山組と工事会社、そして圭介たちの三者が同額ずつを出し合い、それを全部使ってしまうということになった。こんな田舎なら、これくらいあれば充分だと北山は言った。

高瀬と川村、そして圭介の三人が工場を出たのは六時半を少し過ぎてからだった。北山とは七時に駅北側の小料理屋で落ち合う約束だった。北山は翌日の朝早く川崎へ帰ることにしたので、ライトバンを宿の駐車場に入れるからと言って、早めに工場を出ていたのだ。三人は門を出るとすぐ右に折れ、杉木立の中の一本道を歩いていった。十月も半ばになると一時間も前に日は落ちてしまい、杉林は黒く沈んでいた。

杉林の中は街路灯の間隔が長く、その中間は暗闇と変わりがない。三つの人影は街路灯の下に来ると光の輪の中に忽然と現れ、また再び闇に消えていく。人影が消えると黒の濃淡の中に黄を点在させた風景は静止してみせる。

真黒に静止した杉林は昼の生命を全て飲みこみ、巨大な死せる恐竜の姿になる。生き生きと動き回っていた光の中の生命は闇の裏側から抜け出すことができず、光の輪の中に時折現れる人影だけが生き残ったわずかな生命となる。三人が杉林を抜けてしまうと、そこは動きのない死の世界になる。

林を抜けると陸稲の畑だった。左手に遠く広がる畑は関東平野そのものと言ってよかった。畑の向こうには雑木林が点在しているらしく、薄黒いかたまりがいくつかが盛り上がっているように見えた。遠い闇に民家の灯が並んでいた。灯は薄黒いかたまりの縁を乏しい光で飾っていた。

圭介にとっては十数年ぶりのなつかしい光景だった。小学生の一時を東京の近郊で過ごした圭介の心に何か温かいものがよみがえってくるようだった。遊びほうけているうちに暗くなってしまった道々で眺めた暖かい光の色を圭介は思い出していた。

それまで黙って歩いていた川村がため息をつくようにして言った。
「こんな寂しい所によく住めるもんやなあ」
高瀬が頷くのがかすかな光の動きから解った。
「そんなに寂しいやろうか。おれは子供の頃こういう所に住んどったからなつかしいがなあ」
「そやけど、畑と林の他に何もないやん。昼間はまあまあかもしれんけど、夜はあかん」
「そうやろうかあ……」

圭介はこれ以上話す気にはなれなかった。独身寮の屋上や高台から眺める風景は街も港も華やかで美しい。昼も夜も街は生命を持っているように動いている。百万ドルという修飾語を付けて呼ばれる街の夜景は人々の目を魅きつける。しかし、人々の心まで魅きつけているだろうか。豪華に飾りたてられた光の群は圭介を暖かく迎えるのではなく、冷めて距離を置いているように見える。

それに比べると、この寂しい闇の中の灯の色は冷えた肌にじんわりと沁みてくるような暖かさがある。人間が火を使うようになった太古の昔から、人々が求め、親しんできた光の色は、この灯の色ではないだろうか。川村も高瀬も華美な光の装いに目が眩んで、本当の色が見分けられなくなっている。そんな想いが圭介の頭の中で浮き沈みしていた。

振り返った圭介の目に杉林の黒い影が遠ざかっていた。

暖簾をくぐり、ガラスの入った格子戸を開けると、目の前のカウンターから声がかかった。北山たちは既にカウンターに寄りかかってビールのグラスを手にしていた。刺身を載せる分厚い下駄みたいな板が前に置いてあり、赤身の魚が数枚その上に残っている。二本のビール瓶はほとんど空になっている。

ビール瓶を自分のグラスの上で逆さにしながら、北山は入って来た三人に奥へ入るように言った。奥の右隅に上がりがまちがあり、縁側が続いている。縁側の右手の障子を開けると、座敷に五人分の席がつくってあった。外は中庭になっているらしく、ガラス越しに植え込みらしい影が識別できた。

北山と圭介たち三人が上座の席を譲り合って右往左往していたが、結局、一番年長の北山がそこに座った。北山と北山組の若者が並んで座り、その向い側に高瀬と圭介が席を占めた。川村は縁側を背にして圭介と若者との間にいた。

北山が予め段取りを告げていたらしく、五人がテーブルにつくとすぐ女が酒を運んできた。

「もう随分涼しくなりましたからお酒のほうはようございますわねえ」などと、どうしてもよいおしゃべりをしながら女は酌をした。一通りの酌をし終わると女は、

「ご用の時は呼んでくださいね」

と言って出て行った。おしゃべり好きな女が出て行くと、部屋は静かになった。

「まあ、もう一つ」とか「さ、どうぞもう一杯」とか言う他は誰も何も言わずに杯と箸とを交互に動かした。気まずい空気が流れているわけではなかった。五人はそれぞれに満足しているのだ。遠くに踏切の鐘の音が聞こえていた。

若者が、次の仕事は何処へ行くのかと北山に小声で訊いた。

「しばらくは横浜だ」

と北山は杯を口へ運びながら言った。横浜なら楽ができると若者は喜んだ。自宅から通勤できることを若者は素直に喜んでいるのだった。

若者の話が誘い水になって、五人の口数が多くなってきた。皆それぞれ自分が工事で出張した先々の土地のことを話した。共通の土地が話題に上ると座が一きわ湧いた。全国を隈なくまわっている点では川村が一番だった。北山は関東を中心に仕事をしているようだった。

川村が縁側に首を出して酒の追加を注文した。高瀬はもう脚を伸ばして右手を畳についている。

「新しい工業団地ってえのは泊まる所が無くて困るよな。結局、街道筋の連れ込み宿なんかに泊まっちゃったりしてよう」

「そう言やあ、おれもまいったことがあったなあ。宿が分からんのでタクシー拾って『どこか泊まれるとこへ連れてってくれや』って言ったら、温泉マーク巡りやね。ようやく一軒泊めてくれる所があつて上がったら、今すぐ金払え、靴は持って上がれときたわ。部屋に入って布団をめくったらシーツに縮れっ毛がついてやがんの。かあ一つとなつてしもうたなあ、もう」

「そんなのはええほうや。大体おれたちみたいな工事屋は夜眠りに帰るだけやろ。そやからな、おれたちの泊まってる部屋を昼間は商売に使つてるところもあるんや。大事な書類を忘れてたことがあつてな、おれは一度昼間に宿へ帰つたことがあるんや。三時頃タクシーを飛ばして帰つて来て、階段を駆け上がったんや。タクシーを待たしてたから急いでたんで何も確かめずに、いきなり部屋のふすまをガラッや。まいったねえ、あの時は。やってるんよ、おれの眼の前で。慌ててふすまを閉めたけど、もう膝はガクガク、頭はポッポ、ムスコはムクムクや……」

「ほう、ええもの見たやんか。おれも一度昼間に宿に戻つてみるかな」

「……いや角屋はあかん。あれは工事屋専門やからな。……しかしあの時は連れ込み宿のカミさん、オロオロしてしもうてなあ。見るのも気の毒な顔しよつたから、もう何も言わんとタクシーで現場へ戻つたぜ。結局おれがタクシー代損しただけやつた」

「見物料と思えば安いもんやんか」

「『お兄さんとお姉さん、ちょっと失礼』って言ってさ、押入れに頭突っ込んで書類を捜し出してから、『どうもお邪魔さま、どうぞ先をお続けください』ってなこと言って出て来たら面白かつたんじゃねえかい」

北山の冗談に一座の笑いが爆発した。女の話になると話題の種は尽きない。あそこ

のストリップは“そこ”まで見せる。どこそこの町じゃバーの女は口説いたらすぐ寝る。どこやらでは若い子がオールナイトいくらで安かった。皆それぞれの経験談を披露してしゃべりまくる。酒もかなりまわっているので皆饒舌だ。

他人の話に耳を傾けるようなことはせず、ひたすら自分がしゃべることに熱中する。日頃夜遊びの暇もなく肉体を酷使している男たちの欲求の発散はこうして行われるのかもしれない。

北山が若者に盃を持たせて酒を注ごうとした時、若者は真面目な顔になった。

「親方、もういいや、これ以上いったらおれ悪酔いするよ」

北山が若者の顔を睨んだ。かなり酒が入っているにもかかわらず、北山の目はしっかりしている。

「ばかやろう。おれがいつも言ってるじゃねえか。酒はな、腹で飲むもんだ。お前らはすぐ頭で飲んじまうからぶっ倒れるんだよ。普段大して使いもしねえ悪い頭で飲むからだめなんだよ」

若者は苦笑した。

「そんなこと言ったって、ねえ真藤さん。親方と違っておれたちは若いもんねえ。血の巡りが良いからすぐまわるんだよな」

「真藤さんの頭とてめえの頭じゃできが違うわい。真藤さんなら頭で飲んででも何てことなかるうぜ。いつも使ってるんだからな」

圭介は半分冗談に聞いていた。

「おれたちの仕事だってそれほど頭ばかり使うものと違いませ。やっぱり最後には身体がものをいうんやろうと思えますけどね。やっぱり仕事は身体が第一でっせ」

「そんなこと言っているのかい。おれたち誰もそんなこと信用しないぜ……」

北山の顔は笑っていたが、目は真剣な光を帯びている。顔から笑いが消えたところで北山は言葉を継いだ。

「おれたちはな、頭が悪いから身体を使って働いているんだよ。真藤さんたちは、おれたちのできねえことをやれるんだよ、頭が良いから。そうして偉くなるわけよ。おれたちは頭の悪い分を身体を動かすことで穴埋めしてるってわけさ。それがさ、真藤さんが言うみてえに、真藤さんたちも頭を使わねえでよ、身体を使って働いているなんて、おれは信じたくねえな……」

ちょっと謙遜したつもりだった言葉が妙な方向に展開してしまったことを圭介は後悔した。北山の真面目な言葉に圭介は返す言葉もなく、ただ頷くばかりだった。

北山たちのような工事の下請け業者にとっては、設計者は自分たちと格の違うエリートなのである。今まで、北山は川村とよくいさかいを起こしたのに、圭介に対しては異常なほど好意的であった。このヤクザっぽい男と自分はウマが合うのかもしれない。圭介はそんな風を感じることもあった。

たった今の北山の言葉は、これまでの北山の好意的姿勢の理由を、圭介の眼前に浮かび上がらせるものだった。“勤労者”とか“労働者”とかいう一括呼称の非現実性がそこに有った。北山の感覚こそ現実に厳然としてある生々しいものだということを圭介は全身に感じていた。

圭介の口が重くなったのを察して、高瀬が「そろそろお開きにしましょうや」と言った。川村が頷いて店の方へ声を掛けた。

「それじゃあ。……今日はどうもご馳走になりました」

お互いにそう言い合って五人は立ち上がった。北山が呟くように言った。

「今日は飲み過ぎたな。変なことをしゃべっちゃまったかもしれねえな。何をしゃべっていたか、おれは忘れちゃったぜ……」

店を出ると無数の星をばらまいた空が五人の頭上に迫っていた。

「明日の運動会はバッチリだな、真藤さん」

髭の下に白い歯を見せた北山はいつもの顔に戻っていた。